慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	正平版『論語』と古鈔本『論語集解』
Sub Title	A study of two text "Lun yu ji jie (論語集解)" printed in 1392 (Shoheiban 正平版) and copied in Muromachi (室町) Period
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2007
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.42 (2007.) ,p.131- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武文庫長退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20070000-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

正平版『論語』と古鈔本『論語集解』

高橋　智

目次

一、序言……一三一
二、正平版『論語』の流伝……一三三
三、室町時代中期影写正平版『論語』の伝本……一三三
（補説）影写本の底本と正平版の版種……一五一
四、室町時代後期に於ける正平版系古鈔本の伝播……一五四
五、結語……一七八

一、序言

本論は、「室町時代鈔本論語集解の研究」（『斯道文庫論集』第四十輯・平成十八年・以下四十輯拙論と簡称）において、現存する『論語集解』古鈔本の類型化を試みた分類のうち、戊類と己類についての各伝本の価値と意義を検討するのが目的である。即ち、四十輯拙論の総論第二章第二節に述べた『正平版論語』の影響を蒙る古鈔本の考察である。仔細に調査すると、戊類は正平版の影写に近い、正平版の姿を如実に伝えたもので、書写年代も古いことがわかる。そして己類は、やや時代が降って様々なテキスト背景を受容したもので、主として書式上から、正平版の系統に属すると判断されるもので、室町時代後期の成熟した『論語』受容の幅広さを感じさせる伝本の群れである。清原博士家本などとは一線を画するものであるが、訓読の面に於いては、次第に博士家本と混合していく様子もうかがえる。こうした写本の書写者や受容者が浮き彫りにされてくればなお興味深いが、不明なものが殆どであるのも、逆にその時代のテキスト成立を物語る事実と言えるかも知れない。いずれにせよ、この伝本の検討によって、一つには、正平版の占める位置の大きさ、一つには古写本成立の系統性の存在、を観得することができる。言わば、『論語』受容、写本の文化史を解く鍵となる中世必須の歴史資料を提供してくれることであろう。そこに本研究の重要な意義が込められているのである。

二、正平版『論語』の流伝

正平版『論語』が、正平十九年（一三六四）に堺で出版された日本で初めての『論語』の刊本であり、その初刻本の出現以来、覆刻・後印が繰り返され、覆刻双跋本・覆刻単跋本・無跋本が現れ、明応八年（一四九九）には更に覆刻本が誕生したという、正に一世を風靡したテキストであったことは四十輯拙論・序論第一章に既述した。更に、それぞれの開板・刷印時期についての大まかな同定も可能であることを、同じ章のなかで論述した。その流伝を、中世期全般の古鈔本成立の流れと併せ比べるとき、古い博士家本に由来して誕生したであろう正平版が（四十輯拙論・総論・第二章・第五節　小結を参照）、密室から開放されて新興読書層に歓迎された『論語』講読の立役者となって、それを書写伝鈔してゆく鈔本成立の原動力となっていったことは、室町時代『論語』受容の大きな側面であったことが理解されるのである。ならば、中世期当時の『論語』書写伝鈔は如何なる実体を辿ったのかを明らかにすることが、また、逆に、正平版『論語』の存在意義を顕彰することに繋がってゆくと思われるのである。

三、室町時代中期影写正平版『論語』の伝本

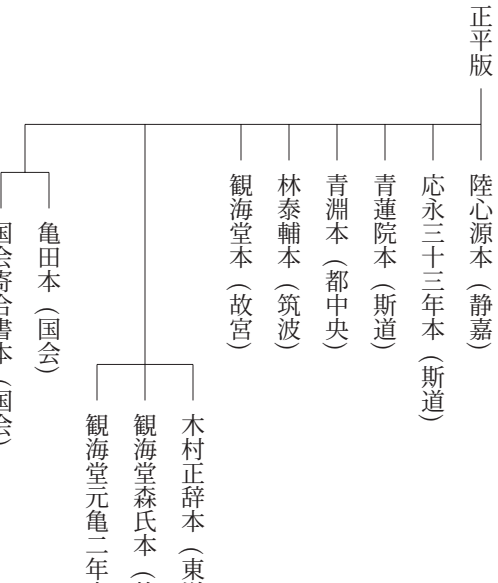
四十輯拙論に述べる、室町時代古鈔本『論語集解』の所謂戊類に属する一群の書写伝本を、ここに影写本（影鈔本も同じ）と名付けたのは、極めて底本の原姿に近い写本であるという意味であって、厳密な意味での敷き写しということではない。また、その書写年代が室町時代の中期とするのは、確たる証拠があるわけではなく、紙質や字様・墨痕から推定しているものであって、経験則・独断の誹りも免れないが、この類に属する幾つかの伝本がみな一様に書写の古さを物語っているのは事実であり、一本、斯道文庫蔵の応永三十三年（一四二六）写本は、室町時代の前期に遡る成立で、この伝本に類するものも、それ相応に古いものであることを想像せしめるのである。しかしながら、前期に位置するものは、これを除いて他に見あたらず、おおよそ、文明年間（一四六九～一四八六）から明応年間（一四九二～一五〇〇）くらいを中心とした時代を遡るものと推定する書写年代を、室町時代「中期」と定めたのであって、天文年間（一五三二～一五五四）を中心とした前後・乃至以降のものと推定する書写年代を「後期」として、区別するのである。そして、この類の室町後期書写に係る影写本も、室町中期に行われた影写本の同一線上に連なるものであり、実際、後期に該当する右の大永四年本・元亀二年本などは、次項に示す己類とは一線を画するものである。従って、これら一群の伝本を殊更に「室町時代中期影写『正平版論語』の伝本」と称したのである。無論、後述のように、その区別は時代の流れとともに、己類の一群となって、テキストの内容の変化も体現するのであって、そこに、明かに講読の変容が見て取れる、学術史が看過してはならない実情が横たわっているのである。いずれにしても、正平版『論語』の歓迎ぶりはこうした伝本によく現されるのであって、広い意味では、影写から校勘・定本という日本漢学受容の現象的形態を如実に体現していると考えられ、甚だ興味深い伝鈔本であると見て取れよう。

さて、この類に属する影写本は、正平版の版式と同じ毎半葉六行、毎行十三字となし、字様の雰囲気をも正平版に

似せるものであって、ある意味では一見してそれとわかる体裁なのである。現所在本は次の通りである。

静嘉堂文庫蔵（1-42）室町時代中期写　影正平版二跋本　清銭曽・黄丕烈・陸心源旧蔵　五冊
斯道文庫蔵（092f5）巻五以下欠　応永三十三年（一四二六）写　広橋家旧蔵　一冊
斯道文庫蔵（092f2）室町時代中期写　青蓮王府旧蔵　五冊
都立中央図書館蔵（青淵42）巻九・十欠　室町時代中期写　四冊
筑波大学附属図書館蔵（ロ860・12）室町時代中期写　林泰輔旧蔵　五冊
台湾故宮博物院蔵（楊氏観海堂本）巻七・八欠　室町時代中期写　四冊
東洋文庫蔵（1c40）巻一・二室町時代後期影写　巻三～十大永四年（一五二四）写　木村正辞旧蔵　三冊
台湾故宮博物院蔵（楊氏観海堂本）存巻一・二　室町時代後期写　森立之旧蔵　一冊
台湾故宮博物院蔵（楊氏観海堂本）元亀二年（一五七一）藤沢一寮写　五冊
国会図書館蔵（123・83rk）存巻一～五　室町時代写　永禄一年（一五五八）奥書　亀田文庫　一冊
国会図書館蔵（せ83）室町時代後期写　寄合書　五冊

これを系図に表すと、次にようになる。



それぞれ奥書の年号や旧蔵者の名前をとって系図のように略称するが、斯道文庫所蔵の二本、応永三十三年本・青蓮院本については、「安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について」（『藝文研究』八十七号・慶應義塾大学藝文学会・二〇〇四・十二　以下藝文拙論と略称）に解説し、また、観海堂本の三種についても、「台湾故宮博物院所蔵　楊守敬観海堂旧蔵　室町時代鈔本『論語集解』について」（『斯道文庫論集』第四十一輯・平成十九・二）に伝本解題を掲載したのでここには重複を避け、先ずは静嘉堂文庫所蔵の陸心源旧蔵の写本から見てみよう。

静嘉堂文庫蔵（1-42）室町時代中期写　影正平版二跋本　陸心源旧蔵　五冊

本書は、正平版『論語』の存在を中国で初めて知らしめた影鈔（写）本で、日本から、朝鮮・中国（明・清）を経て再び日本に戻ってきた、文化交流を示すことで有名な一本である。それも、正平十九年の元刊記をも忠実に鈔写してあったために波紋を投げかけたのであり、後述の筑波大学所蔵林泰輔旧蔵本とともに写本の底本をはっきりと明示した珍しい古鈔本である。

中国で有名になった、ことの発端は、銭曽（一六二九～一七〇一）の『読書敏求記』に著録されたことによる。

（前略）此書乃遼海蕭公諱応宮、監軍朝鮮時所得、甲午初夏、予以重價購之于公之仍孫、不啻獲一珍珠船也。筆画奇古、似六朝初唐人隷書碑版、居然東国旧鈔。行間所注字、中華罕有識之者。洵為書庫中奇本。巻末二行云、堺浦道祐居士重新命工鏤梓。正平甲辰五月吉日謹志。未知正平是朝鮮何時年号、俟続考之。（後略）

銭氏は清初の大蔵書家で、その述古堂は当時、宋元版を中心とする善本を最も多く収蔵していた。銭曽は清順治十一年（一六五四）に先祖と交流の深かった蕭応宮の子孫から、此の本を手に入れた。蕭応宮が明の監軍として明万暦二十五年（慶長二年・一五九七）に朝鮮に出向いた時に得たものであった。文禄慶長の頃（一五九二～一六一四）に日本軍によって朝鮮にもたらされたものであろうか。従って、蕭氏は勿論、銭氏もこれを朝鮮の写本（鈔本）であると認識した。そもそも、明代にあっては、明の書物が日本に持ち込まれることは多かったが、日本から明に書物が売られることは稀だったと思われ、大陸で日本の漢学が紹介されることも無かったから、それも致し方のないことであっ

た。ただ、本書には、異体字や助字が通行のテキストに比べ甚だ多く、宋を遡った唐に近い姿を遺しているとして重宝された。しかし、正平の年号がどうしても朝鮮には見当たらなかった。

その後、この鈔本は転々、清代中期の大蔵書家黄丕烈（一七六二～一八二五）のもとに帰した。黄氏は、清代中期、宋元版の蒐集では最高峰で、銭曽『読書敏求記』所載のものを全て蒐集すると豪語していた。実は黄氏の手に入る前に、顧安道、顧之逵（小読書堆）という蔵書家のもとを経ていた。皆一代の著名な蔵書家である。既に、顧安道の友人で儒者の陳鱣（一七五三～一八一七）は『論語古訓』を著す際に、顧安道から本書を借用していた。その後、嘉慶六年（一八〇一）、北京で陳鱣は朝鮮の使者朴斉家と知り合い、「正平」の年号が日本のものであることを教えられた。黄丕烈も陳鱣の友人で、同じく嘉慶六年入京し、朴斉家と相識となり、これが、日本の写本であることを知らされた。その十八年後、黄氏は奇しくも本書を入手し、跋文を記したのである（静嘉堂本に自筆で認めてあり、のち『士礼居蔵書題跋記』に収載された）。黄氏は「正平」が日本の年号であることになお疑念を抱いていたが、友人翁広平に尋ねたところ確かに日本の年号であることを教えられたと記す。嘉慶二十四年（一八一九）のことである。

（前略）余向於京師遇朝鮮使臣、詢以此書并／述行間所注字。答以此乃日本書。余／尚未信之。頃獲交翁海村。海村著有／『吾妻鏡補』、挙正平年号問之。海村／云、「其年号正平実係日本年号並非／日本国王之号、是其出吉野僭竊其／国号曰南朝、見『日本年号箋』。」拠此、則／書出日本転入朝鮮。遵王但就其／得書之所、故誤認為高麗鈔本耳。／是書向蔵碧鳳坊顧氏、余曾見之、／後帰城西小読書堆、今復散出。因／亦以重價購得。展読一過、信如遵王所云、筆画奇古似六朝初唐人／隷書碑版、不啻獲一珍珠船也。／（中略）己卯中秋五日　復翁識〈黄印／丕烈・蕘／圃〉二顆

印記［文頭に、士礼居印一顆］

また、静嘉堂本の末には、翁広平（一七六〇～一八四二）が黄氏に答えた自筆の書簡と翁氏令写の跋文を附す。その跋に云う。

己卯初夏郡城

黄蕘圃先生出示旧鈔何晏『論語集解』、筆画奇古、紙色亦古香可愛。此書平／曾於銭遵王『読書敏求記』中見、其目云、遼海蕭道公監軍朝鮮時所得、／予以重價購得、行間所注字、中華罕有識者。末云「正平甲辰五月吉日」、未知／正平是朝鮮何時年号。平以『高麗史』『海東諸国記』考之、倶無号。後得／見『日本年号箋』知正平乃日本割拠之号也。按日本九十六世光厳天／皇丙子延元元年、有割拠称南朝者於出吉野、建都改元時中国元／順宗至元二年、歴四世五十五年而終。正平是其第二世自称後村上院／天皇、甲辰是正平十九年、当日本九十九世後光厳天皇貞治三年／中国元順宗至正二十四年也。夫海外之書、槧本写本所見亦有数種、雖／格式各国不同、若行間有注字則唯日本所独也。朱竹垞吾妻鏡／所謂点倭訓於傍訳之不易是也。是則此書断為日本所写無疑、／不僅紀年之符号也。平曾有日本著書目、然所見不得十一。近日宋／槧及宋元旧写本日少。一日此書実繋旧写、況又来自海外、正／遵王所云書庫中奇本而平亦得共賞其奇、幸甚幸甚。　　鷺脰漁翁　翁広平識〈広／平・海／邨・海琛／餘事〉三顆印記

また、翁氏が黄氏にあてた書簡にも同様に記される。

接読

手翁実□　閲注今晨造　前写已見此書、真有昭福也。／其年号正平実係日本年号並非日本国王之号、是其出吉野僭／窃其国号曰南朝　大約在明初　見『日本年号箋』。平於『敏求記』上、已経注明、見在／不携在館中。又拙著『吾妻鏡補』中亦載之。三日前有拙政園居住沈朗亭先生借去。俟還来、再□□也。書此代面順請　　蕘圃先生晨安　　翁弟□広平頓首

こうして、本書は日本の正平版『論語』の転写本であることが明らかにされ、中国でも「高麗本」の通称を以て、高い評価を得ることとなったのである。また、本書の流伝は、日本から朝鮮を経て明・清に貴ばれ、再び日本に帰って来た、日本・朝鮮・明・清の学術文化交流の顕著な例としても大きな価値を有するものであった。そして、そのキーマンである朴斉家の事跡を始めとして、この一連の物語を鮮明にしたのは、『日鮮清の文化交流』（昭和二十二年・中文館書店）を著した藤塚鄰（ちかし）博士であった。

中国の装訂に改装され、清代の白色艶出金砂散表紙。二十五・五×十七・五㎝。四針眼訂で康熙綴じ。全冊に襯紙を添え、美しい唐本に仕立て上げている。二巻を以て一冊に配し、五冊とする。何晏の序を冠し、

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語／

と始まり、次いで改頁して、

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

と巻頭題があり、正平版に同じ形式を受け継ぐ。

書式は無辺無界で、毎半葉六行、毎行十三字でまま十四字。字面高さは約二十一㎝、字幅は二㎝。丁付は附さない。料紙は楮紙。本文は全巻一筆で、本文と同時・同筆と思われる訓点（返り点・送りがな・縦点・附訓・声点・朱点）が附され、後筆の附訓・校字も少々ある。墨痕はややうすいが古樸な感じがする。青蓮院本をはじめとして、以下に述べる青淵本・林本・木村本、皆同様の墨痕字様を醸し出している。

尾題は、論語巻第一などとし、下に「経一千四百七十字／注一千五百一十三字」などと経注字数を加える。巻十の巻末は以下のように記されている。『論語』本文の最終行に続けて、

不知言無以知人也　馬融曰聴言／則別其是非／（馬融以下は小字双行）

也（小字）堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌（甲辰は小字双行）

経一千二百二十三字

注一千一百七十五字

論語巻第十　学古神徳揩法日下逸人貫書（人貫の二字は破損）

従って、正平版の双跋本そのものの刊記であり、双跋本に拠って影写したことが明かである。但し、後述補説の如く、字句の異同から、双跋本も初刻ではなく、覆刻本乃ち双跋論語本に基づいた影写本であることがわかるのである。いずれにしても、こうした書誌事項から考察して、書写年代は室町時代のおそくとも中期を降らない、前期というも可ならんかというべき、応永から寛正時代（一三九四～一四六五）くらいまでの十五世紀前半を範囲とする時代に当てることができるものと推測されるのである。

蔵印に、「虞山銭曽／遵王蔵書」「士礼居」「黄印／丕烈」「蕘／圃」「士礼／居蔵」（陰刻）「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰刻）「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」（陰刻）を捺す。

都立中央図書館蔵（青淵42）巻九・十欠　室町時代中期写　四冊

縹色の古表紙（二十七・五×二十・七㎝）を添える。これは青蓮院本の表紙によく似ている。第一・三・四冊に古い題簽があり、「論語巻之一・三・四」と墨書する。首に魏何晏の「論語序」を冠す。

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語

……

巻頭は正平版と同様に次の様に題す。

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

書式は単辺有界で、毎半葉六行、毎行十三字で匡郭内は二十一・五×十七・七㎝、界幅は三㎝。料紙はやや茶色を帯びた楮紙。墨痕は淡く、さほど古くは感じられないが、筆致には力があり、全巻一筆で書写年代はけして室町時代後期に降るものでなく、明応から永正（一四九二～一五二〇）頃のものと推定する。また、本書は学而篇の注「抑人君自願與為治邪」に作るのを、正平版の単跋本が「邪」を「也」に作ることなどから、或いは、本書は双跋本（「邪」に作る）に基づいた影写かとも想像され、更に、同じ本書の学而篇の注「三百一十六里有畸」を初刻双跋本は「奇」に作り、覆刻双跋本が「畸」に作ることから、さらに推測を詰めると本書は覆刻双跋本に基づいた影写と考えられ、覆刻双跋本の刊刻が寛正五年（一四六四）以前であることは、四十輯拙論に論じたところであり、かれこれ、本書の書写年代を室町の中期に当てることは故なしとしない。ちなみに、この事実は、東洋文庫所蔵（1c40）巻一・二の伝本、並びに故宮所蔵元亀二年本に共通するもので、それらの底本の一致を思わせる。それに対して、青蓮院本以下、その他の伝本は「畸」に作り、初刻双跋本を祖本とする可能性がある。

本書への書き入れは、墨に濃淡二種あり本文と同時期、朱も恐らく同時期であろう。墨の送りがな・附訓・声点を加え、朱の返り点・縦点・ヲコト点を加える。また、短い義注を加えるがこれは本文とは別筆である。

尾題は「論語巻第一　経一千四百七十字／註一千五百一十三字」などと経注字数を附す（ただし巻二・三には字数がない）。

渋沢栄一（一八四〇～一八三一）の旧蔵で、「青淵／論語／文庫」印を捺す。

筑波大学附属図書館蔵（μ860・12）室町時代中期写　林泰輔旧蔵　五冊

縹色の表紙は原装。これに裏打ちを施す。二十八×二十一・六㎝。また、原題簽に「魯論　一　二（九十）」と書写し、第一、五冊（巻九・十）に貼る。この題簽の字様は足利学校の九華（第七代庠主・天文年間に活躍）によく似ている。魏何晏の序を冠す。

論語序

叙曰漢中墨校尉劉向言魯論語二十／

……

そして序の終わりから改頁せずに、本文巻頭が次の様に始まる。従って、正平版の版面とは配行が一致しない。

論語学而第一　何晏集解　凡十六章（凡以下は小字双行）

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

書式は、単辺有界六行十三字小字双行、匡郭は二十・二×十五・五㎝、界の幅は二・六㎝。柱に丁付けあり、「一ノ一」などと（後人の手で、外題と同筆）。後の所蔵者がこの匡郭の外側を切り落とし、新たな台紙（楮紙）に貼り付け、読みやすく改装している。第一・二冊の台紙は近代のものであるが、他の三冊の台紙は江戸期に遡る。古い蔵印もこの江戸期の台紙に捺されている。本文は全巻一筆で、墨痕も濃厚で古く朱も古い。本文への書き入れは、本文同筆と思しき朱引き・朱点があり、また、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓・声点を加える。さらに薄墨の別筆による附訓もある。紙質は厚手のやや明るい薄茶色で、書写年代は、室町中期としておくが、応永・永享（一三九四～一

四四〇）ころの所謂室町前期に遡る可能性もなしとしない。字様は精細で伸びのある筆蹟である。必ずしも正平版の字様に似せてはいない。

尾題は「論語巻第一　経一千四百七十字／註一千五百一十三字」などと経注字数を附す。巻十巻末に、正平版単跋本の刊記を影写する。

堺浦道祐居士重新命工鏤梓
正平甲辰五月吉日謹誌（甲辰は小字双行）

ところで、補説に後述するが、正平版三版の字句異同から比するに、本書は初刻双跋本と字句が一致し、単跋本とは一致しないことがわかる。恐らく双跋本のもう一つの跋「学古神徳揩法日下逸人貫書」が何らかの理由で書写されなかったものであろう。跋文のみをもって単跋本に拠っているとすることはできない。

蔵印に「円融蔵」「盛胤／之印」（梶井宮盛胤法親王、一六五一～一六八〇）、また、『論語年譜』を著した林泰輔博士の「林文庫」「北総林氏蔵」「浩卿」を捺す。本書は博士の男直敬により、大正十一年東京高等師範学校に寄贈され、筑波大学に引き継がれている。

東洋文庫蔵（1c40）巻一・二室町時代後期影写　巻三～十大永四年写　三冊

この伝本は、日本の校勘学を代表する山井鼎『七経孟子考文』に続く斯学の名著、吉田篁墩（一七四五～一七九八）

『論語集解考異』（寛政三年＝一七九一刊）のなかに引用されたテキストで、考証学者藤原貞幹（一七三一～一七九七）所蔵の大永四年鈔本として、正平版に近いテキストと評されている。しかし、実際は、巻一・二とそれ以外とでは別種の写本であり、第一冊の巻一・二が正平版の影鈔本であるのに対して巻三以降は正平版系鈔本の流れにある己類に属するテキストなのである。

表紙は三冊共に後補の黒色で縦二十五・九㎝、横は第一冊が十八・八㎝、二・三冊が十七・七㎝。首に何晏の序を冠し、

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語

……

と始まり、巻頭は

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

と題し、巻五以下は、

論語公冶長第五　何晏集解　凡二九章（凡以下は小字双行）

子謂公冶長可妻也雖在縲絏之中

などと題し、章数が双行になっている。

書式はいずれも無辺無界で、毎半葉六行、毎行十三字で字面の高さが二十一㎝。巻三以下は毎行十四字で字面高さ

二十三㎝。二種の写本ともにそれぞれ一筆である。尾題は「論語巻第一　経一千四百七十字／註一千五百一十三字」などと経注字数を附す。この形式は二種の写本ともに同じである。

書き入れは、第一冊に、藍色による訓点（返り点・送りがな・縦点・附訓・声点・ヲコト点・音注）が附され、建武本（大東急記念文庫蔵・建武四年鈔本）との考異も記す。巻五以下にも墨の返り点・送りがな・縦点・附訓があるが、本文同筆とそれよりも時代の降るものとがあり、また、時代がややそれよりも降る朱筆の同様の訓点も施されている。料紙は楮紙。二種の写本ともに字様は相似、堅く力強い。室町時代中期の面影を充分に感じさせる古さを持つ。

巻三以降の写本の末尾に、

于時（異体字）大永四朞甲申臘月中澣

と本文同筆の奥書がある。これをもって大永四年（一五二四）の鈔本と世に称されるのである。また、巻一・二の書写年代も大永とほぼ大差ないと感じられるが、正平版の単跋本かあるいは双跋覆刻本に基づいた鈔本と目される。

「左京藤原／貞幹蔵書」、「木正／辞／章」（陰刻）（木村正辞）、「江戸四日市／古今珍書僧／達摩屋五一」（岩本五一）、「雲邨文庫」（和田維四郎）印記あり。

末尾に木村正辞の識語が二条ある。

「大永鈔本何晏集解論語三策、獲之於四日市書肆。／蓋京師藤原貞幹之旧物也。幹氏没後流伝于武陽、而卒帰狩卿雲之架中、見経籍訪古志。幹雲二家当時／名声籍甚、而以此書為珍蔵。又吉漢宦、市光彦倶足好古之士、以博学聞。其所著論語攷異、正平本論語／札記並引此書、以為六朝之伝本也。先哲之貴重既如是。豈可不宝而貴哉／文久二年十二月二十六日　欟斎正辞識」

「吉田漢宦論語攷異提要云、大永本者左京藤貞幹／家蔵、係大永鈔本。／経籍訪古志云論語集解十巻、大永甲申鈔本、求古楼蔵、巻首（末と朱で訂正）有大永甲申記、此本合訂為三冊、上一／冊缺、以別本補之。吉漢宦考異称為大永本是也。原係／藤貞幹旧物。毎冊有左京藤原貞幹蔵書之／印、貞幹没後帰求古楼。

正辞曰、巻首宜作巻末。此本近日（今）帰余挿架、其／上冊毎半葉六行行十三字注双行、序及学而篇以建武本記異同。蓋係後人之讎校、吉漢宦曰、嘗聞西京有建武中写本、求而未得者、其／中下両冊毎半葉六行行十四字、按市野光彦／正平本札記亦引此本。

正平本札記云、大永鈔本巻末記云于時（異体字）大永四朞臘月中澣攷異所引

癸亥正月十三日　欟斎正辞識」

国会図書館蔵（123・83rk）存巻一～五　室町時代写　永禄一年（一五五八）奥書　亀田文庫　一冊

後補濃紺艶出し表紙（二十四×十八・四cm）に新補の題簽「永禄鈔本論語集解」を貼付する。内に本文共紙の原表紙を存す。首に何晏の序を冠し、

論語序

叙曰漢中墨校尉劉向言魯論語／

と始まり、本文巻頭は、

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

と題する。書式は無辺無界で、毎半葉六行、毎行十三字で字面の高さは約二十㎝。尾題は、「論語巻第一」などと記し、下に「経一千四百七十字／註一千五百一十三字」のように経注字数を置く。巻五の尾題後に、本文同筆の奥書を書し、

永禄元年　戊午　閏六月二十七日

とある。永禄は、天文を過ぎて室町時代末期の天正をやや遡る頃で、寺院系のテキストも清原博士家との交流深き様相を呈してきた時代である。この時代にもこうした正平版系のテキストが流布していたことは、室町中期のテキストが中世を通じて根強く『論語集解』の受容に関与していたことを物語るもので、中世『論語』古写本の幅広さを感じさせる。

本文と同筆と思われる訓点（返点・送仮名・縦点・附訓）の書き入れが付され、おおよそ清家点の訓法に拠っている。朱点も見える。紙質は薄手で、墨痕はにじみが見え、やや新しさを感じさせる。異体字が多く、正平版のそれによく似ている。正平版の覆刻双跋本にもとづいたものと、字句の異同から勘案される。旧蔵者の亀田次郎（一八七六～一九四四）は国語学者。

国会図書館蔵（せ83）室町時代後期写　寄合書　五冊

新補の茶表紙（二十七×二十㎝）に内扉があり、これも後補のものである。裏打ちを施す丁もあるので、一見して新しく見えるが、仔細に観察すると以外に書写年代は遡るかも知れない。寄合書で、五人の手になる。しかし、料紙

は同一のようで、同時の寄合と見られる。共に毎半葉六行、毎行十三字で巻頭題や、異体字の特徴、字句の異同から、正平版に拠った転写本であることは疑いがない。やや乱雑そうな印象を受ける写本ではあるが、テキストとしては、書写の形態・訓読ヲコト点などの要素で重要な位置を占める一本である。

何晏の序、続く巻頭は次のように題する。

論語序

叙曰漢中墨校尉劉向言魯論語／

論語学而第一　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

五手の書式はそれぞれ次のようになっている。

A、学而第一・為政第二・子罕第九・郷党第十・先進第十一・顔淵第十二、無辺無界で字面高さ約二十三㎝。

B、八佾第三・里仁第四・公冶長第五・雍也第六、単辺無界で辺の高さは約二十一㎝。

C、述而第七・泰伯第八・陽貨第十七・微子第十八、無辺無界で字面の高さ約二十一㎝。

D、子路第十三・憲問第十四・衛霊公第十五・季氏第十六、単辺有界で、郭内は二十三・六×十七・七㎝、界の幅は三㎝。

E、子張第十九・堯曰第二十、無辺無界で字面の高さは約二十一㎝。

尾題は、「論語為政之終」「論語堯曰第十」などと記し、下に双行で経注字数を添える。墨痕はやや染みる箇所が目立

つが、字様には拠るべきものが感じられる。書き入れは、本文同筆の墨による訓点（返点・送仮名・縦点・附訓・声点）を加え、後筆による音注も見える。また、朱による校訂・ヲコト点は本文の手よりやや降るかも知れないが、後述のように正平版初刻本による校字が見えるのは興味深い事実である。ヲコト点は明経点で、全巻に詳細に付点する。全体として、書写年代は永禄より古く、大永から天文（十六世紀前半）の広い範囲を想定するべきかと考えられる。

各冊の首に「龍／雲」の印を捺し、大正二年（一九一三）に国会図書館が購入、「帝国／図書／館蔵」印を捺す。

（補説）影写本の底本と正平版の版種

前述の如く、正平版論語には四種類の版があって、それぞれ正平十九年（一三六四）初刻本（双跋本）、覆刻双跋本（双跋論語本―巻十の尾題を「論」に誤刻するもの）、単跋本、無跋本（単跋本と同版にしてその跋のみを削去したもの）と称される。他に、明応八年（一四九九）大内家の杉武道が覆刻したものもある。それらの由来は本論集四十輯拙論に詳述したが、概ね、覆刻双跋本は応永年間頃（一三九四～一四二七）、単跋本は応仁文明年間頃（一四六七～一四八六）に開板、無跋本は天文年間頃（一五三二～一五五四）の増刷に係るであろうと推測した。従って、古鈔本も、これらのいずれかの版種に依って影写されたわけで、それぞれの源委を推定することによって、ある程度、書写年代との関連を模索できるものと思われるのである。ただし、古鈔本の成立は複雑な校勘の経緯を持つのが通例であるから、字句の異同のみを以て底本を同定することは危険であり、あくまでも推定による附論に属するものであ

ることを申し添えておく。そこで、本文上、三種類の版木がおこされた正平版のそれぞれの異同はといえば、覆刻の関係であるから、違いを捜すのが困難であるが、幸い、長田富作の「正平版論語之研究梗概」（昭和八年・大阪府立図書館正平版論語刊行会）に詳細な版種の研究があり、この研究成果により、三種の版木の違いをおおよそ把握することができるのである。そこに示された二十の挙例のうち、主な目安となる違いをここに挙げるならば、次のようになる。

巻一	学而篇	第五章注	「有奇」
	同	第十章注	「抑人君自願与為治邪」
巻二	八佾篇	第二十四章注	「儀蓋衛邑也」
	里仁篇	第五章注	「時有否泰」
巻三	公冶長篇第五章		「禦人以給」
巻四	述而篇	第三十一章	「君子亦党乎」
	同	同	注「諱曰孟子」
巻七	子路篇	第三章注	「正百事之名」
	同	同	「奚其正」
	同	第五章	「奚以為」
	憲問篇	第三十章	「自導也」

覆刻双跋本は「奇」を「畸」に作る①
単跋本は「邪」を「也」に作る②
覆刻双跋本は「邑」を「下邑」に作る③
初刻双跋本は「否」を「否の変体字」に作る④
覆刻双跋本は「給」を「口給」に作る⑤
初刻双跋本・単跋本はこの五字無し⑥
覆刻双跋本は「諱」を「忌」に作る⑦
覆刻双跋本・単跋本は「正」を「正正」に作る⑧
覆刻双跋本・単跋本は「正」を「正名」に作る⑨
覆刻双跋本・単跋本は「為」を「為哉」に作る⑩
覆刻双跋本・単跋本は「導」を「道」に作る⑪

同　　第四十七章　「吾見其踞於位也」　　覆刻双跋本は「踞」を「居」に作る⑫

そして、以上の項目について影写本の伝本につき字句を比較してみると、青蓮院本・林泰輔本は、④の「否」字の変体字も含めて、悉く初刻本に一致し、応永三十三年本は、初刻本によって影写し、後に覆刻双跋本で校訂した形跡があり、③⑤⑥は字を小字で補い、①⑦はそのままに遺し、④は「否」に訂正したと見られる。国会図書館蔵寄合書の一本は、初刻本によった可能性が高く、③④⑪⑫については覆刻双跋本に一致するが、④の「否」には朱で初刻本の字に訂正することや、⑤の「口」を補筆したり、⑥の五字を補筆したり、かれこれ初刻本と覆刻双跋本が校訂に入りくんでいるようである。観海堂元亀二年本は②以外について初刻本と一致する。木村正辞本は、巻一・二のみが戊類に属するものであるが、③以外は覆刻双跋本に一致する。国会図書館蔵亀田本も巻五までの零本であるが、③以外は覆刻双跋本に一致する。陸心源本は、正平版の二跋を影写している双跋本であるが、③以外の全てに於いて覆刻双跋本に一致し、双跋論語本を祖本としたものであることがわかる。また、観海堂森氏本は③によって、また観海堂本は②⑤⑥⑦などによって、それぞれ覆刻双跋本と類似性を見出す。また、青淵本も③以外は悉く覆刻双跋本に一致する。こうして見ると、一筋縄ではいかぬテキストの成り立ちがよくわかる。しかしながら、おしなべて古い初刻本や双跋論語本（覆刻双跋本）の性格を受け継ぐ写本が多いことは、かかる正平版系影写本の書写年代の古い性質と相関することと思われるのである。

四、室町時代後期に於ける正平版系古鈔本の伝播

さて、こうした正平版論語の影写がどのくらいの頻度でなされたのかは定かでないが、その影写本が更なる発展をして流布を遂げていったであろうことは容易に想像されるところである。室町時代も後期に達すると、緇流や武士の『論語』受容の幅はますます広がっていったであろう。そして、清家本や『論語義疏』系のテキストと一線を画しながら、伝鈔されていった一群の写本が多く存在することとなったのである。そこで、本論集四十輯拙論では、その前述の正平版影写本を、「戊類」と名付けて分類し、戊類のテキストから更に伝鈔されていったと思われる次の一群の古鈔本を「己類」と名付けたのである。即ち、己類こそが、中世後期の正平版系古鈔本であり、その流布の実情を鑑みれば、室町時代の『論語』古鈔本の実態が朧気に把握されるのである。

二十点ほど現存するこの伝本を具体的に見てみよう。順序は便宜的に所蔵者別に記すこととする。

秋田県立秋田図書館蔵（根本　特―263）室町時代後期写　根本通明旧蔵　二冊

本書は、明治の漢学者根本通明（一八二二～一九〇六）が珍蔵していたもので、博士の遺書は悉く郷里秋田県立図書館に所蔵されるが（拙著「根本通明先生蔵書紀略」〈『斯道文庫論集』第三十八・三十九輯・平成十六・十七年〉を参照、以下拙著と略称）、その二千四百冊余りの貴重なる漢籍旧蔵本のなかでも、最も博士が自慢するところのもの

であった。博士の学は『易経』を中心とした経学儒学全般に亘るが、「書剣自得」の蔵印を有し、儒書と刀剣を分身とした。博士は、秋田藩明徳館教授を勤め、勤王派として『易』学を実践し、東京大学教授をも勤め、明治の漢学界の草分けとして、顔眞卿の書風を体し、古武士然とした迫力ある学風を確立した。『周易象義辯正』『論語講義』『詩経講義』など、儒書の講義解説を門弟が整理した著書が多数ある。

本書の解説はまた、拙著三十九輯に詳述したが、根本博士の『論語講義』（早稲田大学出版部・明治三十九年）の底本となり、博士はその著のなかで、この写本は通行本と字句の異同が多く、百済の王仁が伝来した時の写本の系統であるとした。それに対して、漢学者安井朴堂は、この根本博士の言説について一言を述べ、本書が他の古写本と大差ないことなどからして、王仁本の系統と見るは早計であるとし、実は、『論語義疏』などの後来の伝本から出でたテキストであろうと反論した。

単辺有界毎半葉八行毎行十七字（匡郭内一七・七×十三㎝・行幅一・八㎝）で、巻題下の毎章の章数・尾題下の経注字数を有し、書式からは、『論語義疏』の疏文の竄入も見えず、清家本とも一線を画し、流布の多い正平版系統のテキストである可能性が高いと思われる。異体字も多く、全巻一筆の筆致は相当の学力を思わせ、墨痕にも勢いあり、訓点も同時に書写したもので、あるいは、足利学校系の学徒によるものかもしれない。江戸期ころに後補の縹色表紙（二十四×十七・五㎝）に墨流し題簽を添え、「論語」と墨書している。「根本／氏蔵」「根本／子龍／図書」印記あり。

また、参考として述べれば、近代になって、本書を転写した一本が、やはり秋田県立図書館に所蔵される。（二冊18―19）

斯道文庫蔵（091―12）単経本　天正十八年（一五九〇）蔵六道人写　一冊

原装の栗皮表紙（二十七・四×二十・五㎝）に外題「魯論二十篇」と本文同筆にて書す。更に近代の後補紺色表紙を加える。何晏の序は、

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語二十篇皆孔子弟／

と始まり、巻頭は、

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎有朋自遠方来不亦楽／

の如く題し、各章ごとに改行する。何晏の注釈は省かれている。

書式は、無辺無界、毎半葉七行毎行二十字　字面高さ約二十三・五㎝。紙質は楮紙。全巻一筆で、書き入れの訓点も本文同筆である。書き入れの内容は、朱の点・線、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓である。尾題は、論語巻第一の如く、巻十まで通し、経文の字数をその下に記す。巻十の末に、「天正十八暦庚寅（この二字は小字双行）秋仲如蠣庵（この三字は小字）蔵六道人書」と本文同筆にて書する。

斯道文庫蔵（091―67）存序・巻一・二　室町時代後期写　一冊

後補の紺表紙（二十五×十七・一㎝）。全葉に襯紙を施す。何晏の序は、

論語序

叙曰漢中墨校尉劉向言魯論語二十篇皆孔／

と始まり、巻頭は、

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子者／男子之通称／（馬融以下は小字双行）

と題する。

書式は、無辺無界、毎半葉六行、毎行十六字、注小字双行、字面高さ約二十㎝。尾題は、「論語巻第一　経一千四百七十字／注一千五百一十五字」などと経注字数を加える。因みに、巻一の経注字数の注の字数を「一千五百一十五」につくるのは、清家本の系統で、正平版系は「一千五百一十三」につくる。従って、四十輯拙論に所謂、清家本の変型である「丙」種に属する可能性もあるが、巻頭などから、ここは己種の分類にしておく。室町も後期になると、こうした様々なテキストの要素が絡んだ写本が流布するようになる。

筆蹟は一筆で、書き入れも同筆である。書き入れの内容は、朱のヲコト点、墨筆の返り点・送りがな・縦点・附訓・声点、また、他本との校合などである。紙質はやや白みを帯び、厚手である。墨痕からして、室町も末に降ることはなく、享禄天文間（一五二八～一五五四）くらいの書写かと想像する。

巻二末に「永厳」の署名がある。本文同筆。

斯道文庫蔵（091―220）存巻六～十　室町時代後期写　一冊

焦げ茶色古表紙（二十五×十七・五㎝）。先進第十一から末の堯曰第二十までの零本であるから、書式などによる

系統の分類には困難が伴うが、その巻六（先進第十一）首が次のように題していることから、おおよそ、己類であろうと推測するのである。

論語先進第十一　　何晏集解　鄭二十三章／皇二十四章（鄭以下は小字双行）

子曰先進於礼楽野人也後進於礼楽君子也　先進／後進（この四字は小字双行）

書式は、単辺有界、毎半葉八行、毎行二十字、匡郭内は二十×十三・五㎝。界の幅は一・七㎝。柱には、「論語（ともに言偏を記さぬ略字）幾　丁付」と書す。茶色の薄手の楮紙に一筆（巻九・微子篇の第二丁は同時頃の別筆による補写）で書かれた墨痕は、天文永禄間（一五三二～一五六九）を降らぬ書写年代と思われる。

本文と同時期同筆である書き入れには、返り点・送りがな・縦点・附訓・校合があり、朱筆によるヲコト点も附される。欄外の引用に、「疏」（『義疏』）「句解」（『論語句解』）「朱」（朱熹『論語集注』）「師説」などがあり、各章の章旨をまとめた『義疏』の章題注を引用するは、庚種・辛種などの義疏系テキストとの交流を示し、朱子学の新注をも参照しているところは、中世『論語』講読の新しい息吹を感じさせる例である。

また、巻八衛靈公第十五の「子曰民之於仁也」章の欄外に書き入れて、「米文云、子曰父在観其志、父没観其行。集解无此章、鄭本有、古魯皆无此章。此句在学而篇而篇不可小知之下、可読之。越巻爛脱依此□耳。但於当家□不用此説。」とあるのなどを見ると、当家という言い回しから博士家系統のものに基づいている可能性もある。

尾題は、論語巻第六などとし、巻八以外にはその下に経注字数を添える。旧蔵の考ずるべき根拠が何も遺らない。

斯道文庫蔵（092―1）永禄三年（一五六〇）写　高木文庫・安田文庫旧蔵　五冊

本書は、既に藝文拙論に詳説しているので参照。古活字版の蒐集で著名な高木利太氏から安田文庫に移ったものである。己類に分類するが、根本本と同様に、学而篇最後章「子曰不患人之不己知」の注「王肅曰」の一文を添え、正平版『論語』とは異なる一面を持つ。『論語義疏』の系統を引くものに存する注釈である。しかしながら、『義疏』の混入も見えず、題式も正平版系に似る。このように、室町時代後期には、幾種かのテキストが混じり合う状況が常見する。自由な校勘講説が一般に行われるようになった学風の現れであろう。

二十四・一×十八・五㎝で、四周単辺の墨界は十九・五×十四・七㎝、界幅は二・一㎝。毎半葉七行、毎行十三字。全巻一筆。訓点附訓も本文同筆。紙質はやや厚手で、変体字を多く用い、依るテキストの古さを伺わせる古樸な風格を醸し出している。

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章

と題し、尾題に経注字数を具え、末に、

于時永禄三稔　庚申（この二字は双行）五月十七日　五十歳　文彦

と本文同筆の奥書がある。

斯道文庫蔵（092―8）天文十八年（一五四九）写　富岡鉄斎・戸川浜男旧蔵　五冊

本書は、財団法人大橋図書館『論語展覧会目録』に、富岡益太郎氏蔵として出品され、『富岡文庫善本書影』（昭和十一年・大阪府立図書館編）の六十番に載せた。更に、昭和十四年の『富岡文庫御蔵書第二回入札目録』の二十八番に収載、これを、昭和十五年一月二十八日伊賀上野町の沖森書店において戸川氏が入手した（末に昭和二十一年七月

二日、戸川氏の購得識語がある）。その後、英国人在日蔵書家フランク・ホーレー氏（一九〇六～一九六一）が入手したものである。富岡鉄斎（一八三六～一九二四）は南画家で、蔵書は天下に甲たる質量を誇り、昭和十三年五月と十四年三月の二回に亘り空前の高値で売られた。この頃の売り立てで、富岡文庫の他、九条家、内野皎亭、久原家、田安家など日本屈指の蔵書家のものが世に出た。「残花書屋」「賓／南」（陰陽二種）「賓南／過眼」と文学者戸川残花・蔵書家戸川浜男の印を捺し、「宝玲文庫」（ホーレー）の印もあるが、富岡氏の印は無い。

本書は、末尾に本文同筆の次の奥書を添える。

于時天文十八年八月六日始染筆、同十一日書功了。／依有急用子細此書頓写之間、字形尤以卑賤／誤又可巨多、後哲哢嘲殊以有其憚而耳。／筆者沙弥道恵　三十三才

予感勤学之志書与此抄者也　　文主梅千代麻呂之

後補の焦茶色の空押し菱文表紙（二十四・五×十五・六㎝）は近世初、慶長元和年間（一五九六～一六二三）頃の換え表紙と思われる。左上に「魯論語　自第一／至第十（自第十一／至第二十）」と墨書する。五巻をもって一冊とする。第一冊後ろ表紙見返しに「持主梅千代丸」と本文同筆の署名がある。

魏何晏の序を冠す。

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語／

本文巻頭は、序から改頁せずに続けて、

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章（章数は小字双行）

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子者男子之／（馬融以下は小字双行）

と題す。ただし、巻第三里仁篇第四と巻十堯曰篇第二十は、

論語里仁第四　凡二十六章（章数は小字双行）　何晏集解

と章数が中間に位置する。この形式は清家本のものである。

書式は、無辺無界、毎半葉七行、毎行十三字、小字双行、毎行十六字。字面高さ約二十㎝、行幅約一・五㎝。紙質は薄手の斐楮混交紙。本文同筆の墨による返り点、送りがな、縦点、附訓、声点・清濁点、校合を書き入れ、やや時代を降る朱筆によるヲコト点を加える。訓読は、寺院系の読みと清家点の読みが混交している。また、後筆による『義疏』注釈の書き入れも少々見える。

尾題は、「論語巻第一　経一千四百七十字／注一千五百一十三字」などと経注字数を附す。

斯道文庫蔵（092―50）室町時代後期写　伝・祥貞禅師写　五冊

本冊は、写本自体にはそれほど特記する特徴を具えないが、伝来には頗るいわくがある。収納する桐箱には、二種の箱書きがあり、

一は、「天保二年辛卯年／十月十二日再箱而蔵／木村盛芳造」とあり、

一は、「此論語十巻五冊本ハ論語集解攷異第三頁裏中部ニ『尾州有南河州手録本』ニ該当スル尾州伝来ニシテモト

各冊ニ楠氏蔵書印アリシヲ佐々木竹苞楼主人ノ有ニ帰シタル際除去セリト云フ乃チ古来此書ハ楠正成ノ手書ナリト伝ヘタルモノナリ　昭和丁丑十月　千洲記」とあり、

尚かつ、箱に附された「証書」一葉には、「金森氏所蔵祥貞禅師真蹟論語／実世上希有物也偶持来教予管見之／真偽観之則手沢温雅凡眼区窺寧容／思慮雖然神者以崇敬増威物者以証明／為宜幸君勿疑加信仰因弥則加護報／豈薄手若能如是信受如是奉行得福必矣／　于時文政七申四月二十六日／幻住成高三十七世興本禅隆　〈興／本〉〈禅隆／印〉（陰刻）印記」と墨書されている。

木村・千洲、いずれも何人であるかをつまびらかにしないが、伝承の言い伝えの内容は尋常なことではない。先ず、吉田篁墩（一七四五～一七九八）の『論語集解攷異』（寛政三年刊）に引用される尾州本についてであるが、拙論「慶長刊論語集解の研究」（『斯道文庫論集』第三十輯・平成八年、以下三十輯拙論と略称）において、吉田氏が攷異に用いた古刊古鈔本「論語集解」のテキストについて、提要に挙げられたものと現存のものとの同定を行ったが、計七種の伝本を用いて攷異を作成した吉田氏が、尚求めて得ることができなかった二種のテキストを挙げて言う、「嘗て聞く、西京に建武中写本有り、尾州に楠河州手録本有り、皆求めて未だ得ざるものなり。」このくだりを挙げて千洲は本冊を尾州本にあてているのである。建武中写本は、大東急記念文庫現蔵のもので、南北朝の初、建武四年（一三三七）に清原頼元が識語を認めた鎌倉時代末期を遡ると見られる古写本を指す。一方、楠木正成（？～一三三六）の手写本の存在を伝える謂われは不詳であるが、また本冊がそれに相当するという確証もない。ただ、各冊尾に蔵印乃至は署名を削去した痕跡があり、千洲の言う竹苞楼の仕業を裏付けるものではあるようだ。しかしながら、本冊の書写年代は、書誌学的に室町時代の後期、遡っても中期の後半を上限とするであろうことから、南北朝の人の手に係

ることは考えられない。

注意するべきは、興本禅隆の識語に見えることがらで、「金森氏所蔵祥貞禅師真蹟論語」と言う根拠は、本冊に附されたもう一つの文書である「鎮火墨蹟記」と題するメモ書きである。この記は、面山和尚（面山端方・一六八三～一七六九）広録から祥貞禅師（永正八年＝一五一一寂）に関する記事を抄出し、金森正五郎に与えたもので、光明銕山の署名で文政六年（一八二三）に記したものである。そもそも、本冊が、祥貞禅師の書写『論語』と伝えられることをうけて、所蔵者金森氏が、その禅師の伝や真蹟の真偽を証書として求めたものであろう。それによれば、祥貞禅師は、道号を天英といい、永平寺十一世（祖機禅師）の法裔で、文明・明応年間（一四六九～一五〇〇）に宇都宮の成高寺に住し、信州の龍雲・正眼・興禅・妙笑・興国などの古刹の開山であった。禅師が書に秀でていたので、神の化身が現れ、その右手を借りて写経をした。後日、右手を返して鎮火の霊験をもって報謝した。これで、右手が短くなり、短手祥貞とも称され、また、師の墨蹟があるところ火災無しという効験があり、鎮火の墨蹟と言われるようになった、と。また、舜政というのは別号であろうとも言う。こうした言い伝えが『論語』古写本の伝承と重なったものであろう。なお、舜政禅師は、庚類に挙げる斯道文庫蔵本（092-52）の書写者と伝えられ、祥貞禅師・天英と同様の事跡が伝わる。彼此混同して伝わった可能性がある。

その真偽はともかくとして、こうした地方の由緒ある寺院・高僧の営為が、由緒ある『論語』写本の伝来を裏付ける事自体に、『論語』古写本の地方伝播と文化史への浸透を感得できるのではなかろうか。

縹色の古表紙（二六×一九・五㎝）に五冊の中、第一・四冊に古い室町期の題簽を遺す。「論語　自一之四」「論語　自十三之十六」と墨書する。魏何晏の序は、

論語序

叙曰漢中墨校尉劉向言魯論語二／

と題し、巻頭は、

学而第一　　何晏集解　凡十六章（章数は小字双行）

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子者男／（馬融以下は小字双行）

と始まり、この種の伝本が「論語学而」と題するのとは様子を異にする。しかし、本文の系統は助字の有無などを除けば正平版の系統であることは間違いがない。本文・訓点書き入れ・匡郭など全て一人の手になるもので、単辺有界（十九・八×十五・六㎝、界幅二・一㎝）に毎半葉七行毎行十四字で書写する。柱には何も記さず、訓点書き入れは、返り点・送りがな・縦点・附訓を墨で加え、朱引きを附す。欄外には簡単な注釈を書き入れ、それには後筆になるものもあるようだ。また、薄墨の附訓（後筆）もまま見うけられる。字様・筆画は精勤で一字を忽せにはしない。独特の略字もあり、特色ある書き方もあり、それらが型にはまって思いつきでないところが、並々ならぬ筆写の迫力を感じさせる。この、室町時代の中期から後期にかけての特徴ある字勢は、刊経や正平版などの版刻体の影響と、南北朝以来の柔らかな、鎌倉時代以前の書写体風を受け継いだものの影響とが混然となって、表面的には荒々しく感じさせるものの、熟覧するとその画一的な深みを感得できる不思議な魅力を持っている。恰も、日本中世の版刻史を担った五山版が、一見粗雑な彫刻に見えるが、よく見るとそこに中国の古版（宋元版）の味わいが色濃く遺されていると思えてならない感覚とよく似ている。

紙質はやや白みを帯びた厚手の上質紙で、尾題は、「論語巻第一　経一千四百七十字／注一千五百一十三字」など

と経注字数を附す。

慶應義塾図書館蔵（110X・249）応永六年（一三九九）写　竹中重門旧蔵　三冊

本冊は、竹中半兵衛重治（一五四四～一五七九）の嫡男、竹中重門（一五七三～一六三一）の旧蔵と伝える。重門は『豊鑑』の著者として知られる学問武士であった。「竹裏館文庫」の印を捺すことがあるが、これには捺さず、弘文荘の伝来書きが外木函に記されていることによる。慶應義塾図書館には弘文荘伝来の重門旧蔵書が他にも所蔵され（慶長刊、下村生蔵版『中庸章句』など）、由来の正しさを証している。中世の古い古写本が近世に近づく武士の手によって厚く信奉される姿は、古写本流伝の時代による変化を示す事実として見逃す事ができない。

五針眼の綴じによる縹色古表紙（二十三・五×十五・五㎝）は、前記祥貞禅師本によく似る。茶色の古い題簽も祥貞本に似るが、そこに「六藝喉衿」と墨書するのも古い筆蹟である。これは『論語』を雅な言い方に改めたもので、清原博士家がよく用いるもので、ここに少しく清家本の影響をみることができる。何晏の序・巻頭は、次の如し。

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語二／

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章（章数は小字双行）

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子者男／（馬融以下は小字双行）

ただし、本文と同筆と思われる筆蹟で、「世論語序有注…」「疏曰以学為首…」「才本別有論語巻第一五字…」など他

本との校合がなされ、『義疏』を引いているところは諸本との交流という点で注目される。「疏曰以学為首…」は各篇の章旨をまとめた文で皇侃『論語義疏』中のもので、日本の古写本にはよく書き入れられ、また、「世論語序有注…」という、何晏の序に注が附されるのも『義疏』本の特徴である。「才本別有論語巻第一五字…」という、「才本（摺本＝印刷本の略）」との巻頭題の違いも、実は『義疏』との違いに酷似する。応永年間は室町時代の前期で、この時代に遡る『論語義疏』古写本は確としたものが実見できず、受容の実態はなお漠然としている。このように、依然として正平版系統のテキストを中心としながらも『義疏』系統の『集解本』が流行する以前に各テキスト間で交流があった事実を物語る本書の価値は極めて甚大であると言わねばならない。

書式は単辺有界、毎半行七行毎行十四字、匡郭内は十七・一×十二・五㎝。界の幅は一・八㎝。薄手の楮紙で、柱には「論語巻幾　丁付」と墨書、尾題は、「論語巻第一終　経一千四百七十字／注一千五百一十三字」などと経注字数を附す。朱のヲコト点・墨の訓点（返り点・送りがな・縦点・附訓・声点）を附し、朱熹の新注や、『義疏』・音注などを墨筆で書き入れる。書写字様は、謹直というよりは軽快な筆致であるが、一定の規範性を最後まで崩さない。

末尾の奥書も本文同筆で、「于時応永第六仲冬日　書写之了」と記す。室町時代の『論語』古写本中、最も古い奥書を有するものである。

東洋文庫所蔵（1C42）存巻一～五　室町時代中後期写（寄合書）

永正十二年（一五一五）校訂奥書本　一冊

本文と共紙の表紙（二五・五×一八・五㎝）で仮綴じの装訂にしてあり、次の古い書き外題がある。「永正拾貳年

／論語　何晏集解自一至五（この八字小字双行）」と。末尾に永正十二年の奥書があることによってこのように記される。昭和六年の大阪府立図書館『論語』展覧会、また、昭和初期の大橋図書館『論語』展覧会に「永正十二年鈔本」として出品されたもので、爾来その年号が書写年代であると考えられてきた。しかし、本文・後補補筆・奥書などの墨痕を仔細に検討すると、永正の奥書は本文より後筆に係る可能性が高く、本文書写は永正よりもかなり遡るのではあるまいかと推測されるのである。

何晏の序は次の如く首に置かれ、また巻頭も他の伝本と同じように題する。

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語二十篇皆孔子弟／

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章（章数は小字双行）

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子者男子之通称謂孔子也王粛曰時／（馬融以下は小字双行）

書式は、単辺有界の墨界（二十二・五×十四・九㎝　界幅二・二㎝）に毎半葉七行毎行二十字で全書一筆にて書写する。料紙は楮紙で、やや茶色味を帯びる。また、本文と同時と思われる墨の返り点。送りがな・附訓を加え、朱引き・朱点をも添える。尾題は「論語巻第一」の如く記し（但し巻五は欠く）、その下に、「経一千四百七十字／注一千五百一十三字」などと経注字数を記す。

巻五の尾題から改丁せる紙葉末尾に、「于時永正拾貳年　乙亥　南呂吉日」と朱による奥書が記される。この手は

或いは本文に加える朱点朱引きと同筆かとも思われ、更に、巻九の首題「論語子罕巻第九」の下に加えられた「何晏集解　凡三十一章／皇三十章」の文字が朱による後筆と考えられ、尚かつ奥書と同筆であることから、奥書は本文とは同時期ではなく、本文書写より時代が降って、朱筆によって講読校訂した際に加えられた年号であるとするのが自然であろう。実際、紙質墨痕を按ずるに、永正（一五〇四～一五二〇）よりも古い感触を与え、書写年代は室町時代の中期から後期に遡り、或いは応仁の乱（一四六七）以前に属することもあり得る。

本書の特徴と意義は、正平版系の類にありながら、本文と同じくらいの時期に、本文とは別筆でなされた書き入れがあり、皇侃『論語義疏』と邢昺『論語正義』の、各篇の趣旨をまとめた解説文を抜き書きして欄外等に遺していることである。例えば、雍也篇の首に次のように書き入れる。

雍孔子弟子也、明其才堪南面而時不与也、所以次前者、其雖無横罪、亦是不遇之流、横罪為切、故公冶前明、而雍也為次也。

正義曰此篇亦論賢人、君子及仁、知、中庸之徳、大抵与前篇相類、故以次之。

という具合で、前者が『義疏』で、後者が『論語正義』に相当する。すなわち、この時代に『論語義疏』の影響は色濃く正平版系テキストにも反映されていたのであり、『義疏』『正義』は当年の『論語』講読には欠かせないものであったことが理解される。と同時に、こうした痕跡からも、義疏系の写本が正平版系の写本よりも後出ではなかろうか、という想像を可能ならしめるのである。

書写字様は略字が多く、やや粗に見えるが、一字一字に丁寧な力を現している。「雲邨文庫」（和田維四郎）の印記あり。

国会図書館蔵（WA16/12）巻一～五　室町時代写
巻六～十　室町末近世初期　源昌勝入道徳庵写
賀茂三手文庫旧蔵　四冊

四冊とも同じ後補の江戸期、茶褐色表紙（二十六×二十・三㎝）。首に何晏の序を冠し、

論語序
叙曰…

と始まる。また、取り合わせ本のそれぞれの首、巻一と巻六の巻頭は次のように題す。

論語学而第一　何晏集解　凡十六章（章数は小字）
子曰学而時習不亦悦乎　馬融曰子者男子之通称（馬融以下は小字双行）
論語先進第十一　何晏集解　凡二十三章（章数は小字双行）
子曰先進於礼楽野人也後進於礼楽

書式は単辺有界に、毎半葉九行、毎行十六字で書す。辺の大きさは二十二・四×十七・六㎝。巻六以降は、無辺無界で七行十五字、字面の高さは約二十一・五㎝。尾題は、「論語巻第一」などと記し、下に経注字数を双行で附す。これは、巻十まで同じ様式である。本文への書き入れは、巻五までが墨の返点・送仮名・附訓、朱のヲコト点、縦点、朱引き、巻六以降が墨の返点・送仮名・縦点・附訓に朱のヲコト点と朱引きを加えている。いずれもそれぞれの本文書写者と同一人かまたは同時代の人によって加えられたものであろう。訓読はいずれの写本も、ほぼ博士家の読みを

基礎としていて、ヲコト点も経伝に属する。

学而篇最後章「子曰不患人之不己知」に、「王肅曰」の注を一文添え、正平版『論語』とは異なる一面を持つ。『論語義疏』の系統を引くものに存する注釈である。これは、斯道文庫蔵永禄三年本などと共通する本文系統の要素であるが、『論語義疏』系のテキストが影響しあった名残である。

巻一～五の写本は、やや茶色を帯びた古色の料紙で、字も太く落ち着いた感じを抱く。巻六以降の写本は、明るい感じの料紙で、柔軟な字様を保ち、室町末期に常見の字画曲線を有している。後述のように、この部分の写本は、源昌植の曾祖父が書写したと証されていて、元禄十五年（一七〇二）から辿ると、仮にこの時源昌植が四十歳として、四十歳ずつ遡っていけば曾祖父が四十歳の時は天正十年（一五八二）にあたり、室町時代末期頃の書写にかかることは間違いがない。

「賀茂三手文庫」（陰刻）の印記を捺すが、何故かみな上下転倒している。上賀茂神社の旧蔵。上賀茂社の東手・中手・西手を合わせて三手と称し、その文庫は江戸時代の中期に再興された。明治には散佚したものが多く、本書は、明治四十二年に帝国図書館が購入した。

上賀茂社への奉納識語が以下の各所に見られる。

第一冊前表紙見返し

論語集解四冊奉納

上加茂社文庫

元禄十五年壬午八月釈菜日

山城州石清水神職
宇治大路安之進　源昌植

巻二末
論語集解四冊内自学而篇至里仁篇　奉納
上加茂社文庫
元禄十五年壬午八月吉旦　山城州石清水神職
宇治大路安之進　源昌植

巻五末
論語集解四冊内自公冶長篇至郷党篇　奉納
上加茂社文庫
元禄十五年壬午八月吉旦　山城州石清水神職
宇治大路安之進　源昌植

巻七末
論語集解四冊内自先進篇至憲問篇　予曾祖父昌勝入道
徳庵真筆也　奉納　上加茂社文庫
元禄十五年壬午八月吉旦　山城州石清水神職
宇治大路安之進　源昌植

巻十末

論語集解四冊内自衛靈公篇至堯曰篇　予曾祖父昌勝入道

徳庵真筆也　欲伝不朽今茲奉納　上加茂社文庫

元禄十五年壬午八月吉旦　山城州石清水神職

宇治大路安之進　源昌植（タネ）

静嘉堂文庫所蔵（101-20）天文十五年・十六年（一五四六・四七）写　一冊

新補表紙（二十六×十七・九㎝）は、もと二冊であったのを改装したものである。首に、何晏の序を冠す。

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語二十

本文は序の後に改頁せずに一行を空けて続く。

論語学而第一　　何晏集解　凡十六章（章数は小字双行）

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子者男子之通称謂孔子也王粛／（馬融以下は小字双行）

書式は、無辺無界で毎半行八行毎行十七字、注は小字双行で毎行二十七～八字、字面の高さは約二十一㎝、料紙は薄手の楮紙を用い、後に全紙裏打ちを加えている。本文は全巻一筆で、また、書写時と同時同筆の書き入れ（返り点・送りがな・縦点・附訓・声点・朱引き・序のみに朱のヲコト点）を加える。後筆の訓点もあるが、全体として丁寧な訓点課本となっている。尾題は、論語巻第一　経一千四百七十字／注一千五百一十三字　などと経注字数を附す。巻

十まであり。

巻五・十にそれぞれ本文同筆にて次の奥書がある。

天文十六年丁未二月五日書之畢

天文十五年丙午十二月二十八日書之畢

天文十五年は一五四六年で、室町の後期にあたる。字様は墨痕濃密なるも、室町末期の風を既に感じさせる。正平版系の古い異体字と近世初頭の木活字体の風格が混在している。

正平版との関係は、文字の異同の点では、初刻本・双跋本・単跋本いずれの要素も窺い知れるのであって、この時期のテキスト成立の緩やかな受容を示しているようである。

日光山輪王寺蔵（85-2-1467）存巻七～十

文亀二年（一五〇二）写　天海蔵　一冊

天海（一五三六？～一六四三）は天台僧で、慈眼大師。徳川家康・秀忠・家光三代に仕え、寛永寺を創建、寛永十四年（一六三七）木活字一切経（天海版）を印行した。早く、永禄三年（一五六〇）から四年間、足利学校で学んだとされ（川瀬一馬『増補新訂足利学校の研究』昭和四十九年講談社）、その際に蒐集したものかも知れない。

縹色古表紙（二十二×十五・五㎝）に、「四十六／天海蔵／論語　従七至十」と墨書する。表紙見返しにも「天海蔵」と墨書する。いずれも同筆に見える。

本文の首は次のように題する。

論語巻第七

論語子路第十三　何晏集解　凡三十章（凡以下は小字双行）

子路問政子曰先之労之　孔安国曰先導之以徳（孔以下は小字双行）

この題の様式は、『論語義疏』の影響を受けた「辛類」に似ているもので、本文に『義疏』の竄入はないものの、『義疏』系のテキストとの往来が見て取れる。書式は、単辺有界毎半葉八行の墨界に毎行十四字に記し、界の大きさは縦十七・一㎝、横十二・三㎝、毎界の幅は一・五㎝。料紙は楮紙で、本文は一筆、更に本文と同時同筆の墨による返り点・送りがな・縦点・附訓を加え、また、朱筆によるヲコト点・朱引きをも加える。本文の書写字様は略字が多く、やや拙に見えるが筆画には由るべきものがある。テキスト・訓法には既に諸本校訂混在するものがあり、何と特徴づけるものがないが、京都や足利などの学問を柔軟に伝承した学僧の手になるものであろう。巻末には、「論語巻第七」などと尾題を記し、その下に「経二千三百九十四字／注二千五百五十六字」などと経注字数を附している。

巻十の末には、「于時文亀二年四月五日書之終」と本文同筆の書写奥書を添える。文亀二年は、写本の年代から考察すると、室町時代の中期の末に当たる時で、それは、博士家の清原宣賢（一四七五～一五五〇）が活躍し、定本を定める永正年間よりやや前に属し、正平版が覆刻された明応年間にやや遅れる頃である。正平版を中心とした古いテキストを中心に、爛熟した写本の伝播がもう至るべき処に達していた感を抱かせる。

某家蔵　巻三・四・九・十　近世初期写　二冊

原本の所在は未確認であるが、斯道文庫に所蔵する写真によって、その姿が想像される。仮綴じで、公冶長第五第

十一章「剛　孔安国曰慾／多情慾之也（孔以下は小字）」から泰伯第八第十四章「子曰不在其位不謀」まで、陽貨第十八第三章「莞爾而笑」から堯曰第二十尾までを存し、

論語雍也第六　何晏集解　凡三十章

子曰雍也可使南面也　苞氏曰可使南／面者言任諸侯（苞氏以下は小字双行）

などと題す。また、尾題は「論語巻第三」などと記し、下に経注字数を双行で附す。書式は単辺有界で、辺の大きさは二十・五×十六・三㎝。毎半葉七行十五字。本文は一筆で、訓点（返点・送仮名・縦点・附訓）も同筆に見える。朱点もあるようだ。また、付箋に本文同筆にて『論語義疏』の各章の総括文を抽出して書写して貼付する。室町時代後期には『論語義疏』の流布影響が甚大であったことを示す一例である。しかし、本文は、忠実ではないが、正平版系のテキストを受け継いでいるものと想像される。全体として字様は粗であるが、講読修習に熟した筆勢を感じさせる。

お茶の水図書館成簣堂文庫蔵（1140089）存巻六～十

室町末近世初期写（寄合書）　一冊

薄茶色、江戸時代前期頃の改装表紙（二十七・二×十八・八㎝）に「論語」「冬」と墨書。巻頭は、

論語先進第十一　何晏集解　鄭二十三章／皇二十四章（鄭以下は小字）

子曰先進於礼楽野人也後進於礼

と題す。書式は毎半葉七行、毎行十四字、界の幅は二・五㎝で、巻六、巻七、巻八、巻九～十がそれぞれ異なる筆蹟

で四手からなる寄合書きである。書き入れは墨の返点・送仮名・縦点・附訓に朱のヲコト点が加えられる。訓法は清家点に忠実である。本文と同時頃と思われる。尾題は、「論語巻第六」のように題し、下に「経二千六十二字／註一千九百四十六字」と字数を附す。

「天祐」（陰刻）「宗挙」の印記を捺す。また、「蘇／峰」（陰刻）の印記あり、徳富蘇峰の旧蔵。

お茶の水図書館成簣堂文庫蔵（1140082）存巻七～十　室町時代末期写　二冊

後補薄朱色古表紙を附す。縦二十七・二×横十八・三㎝。「魯論　五之十」などと墨書。本文巻頭は次のように題す。

論語巻第九

陽貨第十七　　何晏集解　凡二十四章（凡以下は小字双行）

陽貨欲見孔子々々不見　孔安国曰陽貨陽虎（孔安国以下は小字双行）

尾題は、「論語巻第七」などとあり、「経二千三百九十四／注二千五百五十六」などと経注字数を添える。書式は、厚手の楮紙に、無辺無界、毎半葉七行、毎行十四字、字面高さ約二十二㎝で書す。本文同筆の訓点（返点・送仮名・縦点・附訓）を墨にて、また朱点朱引きをも加える。また、後筆の書入れに、「朱註…」と朱熹の新注を参照しているのが見える。訓は概ね清家点と思われる。巻十の末に「建長七年乙卯仲春十二月　書写畢」と本文別筆にて奥書を加えるが、これは後人の技で、本文書写とは関係がない。建長七年は一二五五年で鎌倉時代の前中期に当たる。写本としては古い時代に相当し、本書の書写年代とは考えられず、本奥書としても、建長のテキストは存在が知られてはい

ない。

「横地氏／珍蔵記」「靄隅文庫」などの印記あり。「蘇峰／学人」印あり、徳富蘇峰の旧蔵。

龍門文庫蔵（230　二の七）室町時代中後期写　四冊

全体として古い写本の風格を醸し出している。縹色の表紙（二十四・六×二十・五㎝）は室町時代末期の古表紙で、「喉襟　春〜冬」と外題墨書するのも或いは室町時代の末期に係るか。何晏の序は、

論語序

叙曰漢中塁校尉劉向言魯論語

と題す。「論語」には「リンギョ」と仮名を振る。引き続き改頁せずに、本文が始まる。

論語学而第一　凡十六章　何晏集解

子曰学而時習之不亦悦乎　馬融曰子（馬融以下は小字双行）

と、学而篇は題する。「凡十六章」の章数が、「何晏集解」の上に来るのは清家本の様式であるが、為政篇以降は皆、章数が「何晏集解」の下に来ている。尾題は「論語巻第一」以下巻第十まであり、下に経注字数を双行で附する。書式は、単辺有界の墨界に、毎半葉七行、毎行十三字で書す。辺の大きさは、縦十九・二×横十八㎝。界の幅は二・五㎝。複数の書写者による寄り合いと思われ、墨の訓点（返点・送仮名・縦点・附訓）を附し、これは本文と同時の手になると思われる。朱筆で、墨の訓点をなぞるのは、後筆のものか。料紙は厚手の楮紙を用いるが、全体として明るい感じの紙色で、室町時代中期頃の正平版の紙質に似ている。墨質濃厚で異体字が多く、その様相など、正平版『論

語』の風格を持し、訓は、述而篇の「述べて作せず」「執鞭の士といふとも吾れ亦た之をせん」「威あって猛からず、恭しふして安し」等の例を見ても、清家本の読みと青蓮院本などの寺院系の読みを混在している状況を見て取れよう。

冊一の末に「従四位下清原宣光」と墨書する。所持署名である。宣光は清原氏舟橋家庶流の伏原家の明経博士で一七五〇（寛延三）～一八一八（文政十一）。古く博士家に伝わったものかは定かでないが、宣光は本書を講義に用いたらしく、書入れが少々見える。清家も近世を降ると、家伝のテキストに付加される秘伝性に厳格さが薄れたため、寺院系の要素を持つこうしたテキストも受容の範疇に含まれていた。他に、「豪仙之」「長満丸」などの墨書署名が見えるが詳細は不明である。

五、結語

以上、正平版『論語』より派生した古鈔本を、戊類・己類に分類してその伝本を検討した。室町時代中期、夥しく書写講読された『論語』とりわけ『論語集解』が、正平版という、禁裏から開放された公（おおやけ）の刊本の恩恵によるものであることは、従来、伝本実査をもとに論じられることがなかった。そして、その派生した古鈔本の実態はといえば、『論語義疏』系のテキストとの交流往来を経たものであることも、文字校勘の結果、明かなところである。更には、そのテキストをもって読習に励んだ学徒の流行は、この頃、依然、清原博士家の訓法になびくものであったことも当年の特徴としてとらえることができた。次第に、自由闊達な学問を是とする緇流の台頭は、こうした中期

の成果を『論語』古鈔本の活性化へと導き、己類に見る変化に富んだテキストの発生を促した。顧みれば、軸装巻子本を中心とする秘説の訓詁学が、最高の経典解釈に達した南北朝以前の王朝風の豪華な学問を支えてきたのであった。室町時代は最早、その高く築かれたそびえ立つ塔壁を、打ち壊すことなく徐々に解体していったのである。清原宣賢の新しい博士家儒学がやってくる頃には、既に、緇流の間では相当に独自の『論語』講読が行われていたことが、以上の調査で認識できる。裏を返せば、清家も宋学の新たな導入なくして、経典解釈の主導権を握ることがかなわぬ情勢となったともいえるであろう。室町時代中期から後期にかけて、『論語』講読の展開はかかる鈔本を柱として、大きな転換期を迎え、日本に於ける儒学の動向についえぬエネルギーを与えたのであった。そして、その力は、『論語義疏』を加味した新たなる古鈔本の潮流を生み、更なる発展を遂げて、錯綜して講読の裾野を広げて行くことになるのである。